



2016

年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 千鶴子, 谷野, 圭亮, 古田, 和久, 和田, 健, 早川, 潔, 倉橋, 健介, 東田, 卓, 鯨坂, 誠之, 石丸, 裕士 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007520

2016年度ティーチング・ポートフォリオ作成 ワークショップ開催報告

井上千鶴子*1, 谷野圭亮*1, 古田和久*2, 和田健*3,
早川潔*4, 倉橋健介*5, 東田卓*5, 鯨坂誠之*6, 石丸裕士*7

A Report on the Workshop of Teaching Portfolio in 2016

Chizuko INOUE*1, Keisuke TANINO*1, Kazuhisa FURUTA*2,
Takeshi WADA*3, Kiyoshi HAYAKAWA*4, Kensuke KURAHASHI*5,
Suguru HIGASHIDA*5, Shigeyuki AJISAKA*6, and Hirohito ISHIMARU*7

要旨

大阪府立大学工業高等専門学校は、2009年1月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催した。その後、ティーチング・ポートフォリオ研究会として毎年2～3回のワークショップを開催し、教育改善の研究に取り組んでいる。本稿では、2016年度に開催した第16・17回のワークショップの概要について、ワークショップ参加者の報告による教育改善効果の考察と検証を報告する。

キーワード： ティーチング・ポートフォリオ, 教育改善, メンティー, メンター, 更新ワークショップ

1. はじめに

大阪府立大学工業高等専門学校（以下、本校と略す）は、2009年1月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ（以下、TPと略す）作成ワークショップ（以下、WSと略す）を開催した[1]。以後本校TP研究会は年2回（2011年度は3回）のワークショップを開催し、TPWSによるより効果的な教育改善の研究に取り組んできた。2017年5月現在では、校長副校長を含めた常勤教員70名中52名（約74%）がTPを作成している[2]。本稿では、2016年度に開催された第16回および第17回TP作成WSの概要について記した後、参加したメンティー及びメンターの感想と考察を記す。なおTPについての詳細、特徴等については既報[1][2]ならびに書籍[3][4]を参照されたい。

2. ワークショップの概要

参加した作成者（以下メンティー）と助言者（以下メンター）の人数は、表1の通りである。日程は、第16回が2016年8月8日～10日、第17回が2016年12月26日～28日である。第16回、第17回ともアカデミック・ポートフォリオ（以下、APと略す）作成WSおよびスタッフ・ポートフォリオ（以下、SPと略す）作成WSと同時開催で実施した。内容はオリエンテーションの後、数回のメンターとの個人面談（メンタリング）を交えながら作成し、一方WSを運営するメンターはメンターミーティングでメンタリングの進め方の報告と検討を行っている。簡単なスケジュールを表2に示す。メンターミーティングを統括するスーパーバイザーは、第16回には名古屋外国語大学の加藤由香里氏、第17回には東京大学の栗田佳代子氏と福井県立大学の山川修氏にご担当いただいた。

TPは一度書いたら終わりではなく、数年ごとに更新することが望ましいとされている。本校では相互メンタリングとプレゼンテーションを取り入れた更新WSを行っている。WSでの更新についても、2名の考察を掲載する。

なお本校のWSは、2013年にティーチング・ポートフォリオ・ネットワークが公開したTPワークショップ基準を満たしている。

2017年8月21日受理

*1 総合工学システム学科 一般科目

(Dept. of Technological Systems : Liberal Arts)

*2 機械システムコース (Mechanical Systems Course)

*3 メカトロニクスコース (Mechatronics Course)

*4 電子情報コース (Electronics and Information Course)

*5 環境物質化学コース (Environmental and Materials Chemistry Course)

*6 都市環境コース (Civil Engineering and Environment Course)

*7 奈良工業高等専門学校 (National Institute of Technology, Nara College)

表1 2016年度に開催したTP作成WSの概要

	メンティー	メンター
第16回	10名(内学外7名)	9名(内学外3名)
第17回	12名(内学外12名)	12名(内学外5名)

表2 TP作成WSのおもなスケジュール

	第1日	第2日	第3日
午前		個人メンタリング(2) TP作成作業	個人メンタリング(4) TP作成作業
午後	オリエンテーション 個人メンタリング(1) TP作成作業	個人メンタリング(3) TP作成作業	TP作成作業 プレゼン準備 TPプレゼンテーション 修了式
夜間	夕食会 TP作成作業	TP作成作業	修了を祝う会

3. ティーチング・ポートフォリオを執筆して

TPを作成して(一般科目 梶 真理香) 「ティーチング・ポートフォリオ」という言葉は、本校採用時の提出書類の一つにそれがあったため、そこで初めて見聞きした。当時はそれが何だかよくわからないまま見よう見まねで書いてはみたが、やはりよくわからないまま提出をした。

着任後、TP作成WSの案内を受け取ったのは6月上旬頃で、その2か月後のWSに参加しTPを作成したのだが、参加するまでは「採用時に一度書いているのにもう一度取り組んでも意味がないだろう」、「3日間朝から夕方まで拘束されるのは体力的に不安だ」などの負の感情が強く、周りの先生方は「作成して良かった」という意見の方が多かったが、それでもその負の感情は消えることなく疑いながらも騙されたつもりで参加してみることにした。実際参加してみると、前者の不安は払拭され今は参加して良かったと思っている。後者の不安についてはメンターであれメンティーであれ今後WSに参加をする際には付きまとうだろう。裏を返せばそれほど充実した3日間であったと感じている。

本職に就職する前、私は私立の進学校で受験指導をしてきた。私立大学で非常勤講師をしたこともある。それぞれの学校・学年に合わせて授業を行い反省等を繰り返していくうちに、自分なりに授業の進め方については固まりつつあった。そのため、TPを作成したところで新たな発見等は何もないと思いついていたが、メンターの先生と話していくうちに、自分がそういった教育方法を取る理由や、それが自身の学生時代の苦い経験を基にしたものだということがわかってきた。また普段は雑務や成績不振の学生対応に追われる毎日でなかなか初心にかえ

ることができないが、自身の経験を振り返るうちに初心を思い出し、新たに短期目標や長期目標を定めることができた。最近はまだ日々のことに追われる日が続いているが、この「TPを作成して」を書き進めるうちにTP作成当時の気持ちを思い出し気持ちを新たにしている。これからも積極的に初心を思い出す機会をつくらねばならないと思った。

最後に、TP作成にあたり親身になって相談に乗ってくださったメンターの先生をはじめお世話になった方々に心からお礼申し上げます。

4. ティーチング・ポートフォリオを更新して

TP更新ワークショップに参加して(早川潔) 平成22年にTPを作成した後、3回更新した。最初の更新は平成23年、2回目の更新は平成26年である。3回目の更新は、平成28年8月31日に行われたTP更新WSである。その報告を行う。

今回、大きく変わったのは読み手である。以前までは、主に学生に読んでもらうために、教育・研究を中心に執筆した。今回は、学外を含めた教員に読んでもらうために執筆した。したがって、校務分掌および地域貢献の項目を拡充した。高専でのTP活動の主な目的は教育改善にあるが、校務分掌や地域貢献から教育へのフィードバックがあるので、教育改善のためというのはかわりないTPとなった。

今回、2人1組になってTP更新作業を行った。午前中は相互メンタリングの時間である。相手のメンタリングをするために、相手のTPを読んだ。その後、教育理念を念頭におきつつ、どこを更新するか、エビデンスがあるかかなど、TPを更新する上での確認作業を行った。午後からTPの更新作業を行った。私の場合、教育に関する項目はほぼ固まっているので、年度更新程度の小幅な更新にとどめ、他の3項目(研究、校務分掌、地域貢献)を重点的に更新することになった。

研究で更新した箇所は、他分野との融合研究の部分である。ここ数年、建築関係、リハビリ医療関係の先生と共同研究を行っているので、他分野との融合を中心に業績を記述した。また、電気学会の技術調査委員の活動や泰日工業大学での招待講演について記述した。

校務で更新した箇所は、担任業務と校務で使用するシステムに関することである。担任業務としては、出口(就職・進学)を考えた学生指導を行った。平成27年度は3年の担任を行ったが、この段階から学生の進路を考えながら、個人面談を行ったり、HRなどで工場見学や就職セミナーなどの情報提供を行ったりした。校務で使用する

システムとしては、成績などを管理するシステムの導入や仕様書作成に関与したことと本校のホームページシステムの移行に関して記述した。

地域貢献に関して更新した箇所は、研修の外部講師および地域企業との共同研究である。近年、注目を浴びているIoT技術の講習会の講師について記述した。また、企業との共同研究に関して記述した。

これらの活動から、電子情報コースのカリキュラムを強化する必要があるのではないかという思いが湧いてきた。他分野と融合する上では、電子情報に関する技術は要の技術なので、他分野との融合を考えつつ、電子情報の技術をしっかり教育する必要があると感じた。また、企業と連携しながら、主体的な教育環境が実現できれば、学生と企業とのミスマッチなどが起こらず、学生のためになると思った。これらのことを短期・長期目標とした。

正直、毎年、TP更新WSに参加するのは大変かもしれないが、数年に1回程度、参加して、1日中自身の教育活動を振り返るのは、有意義だと感じた。

TP更新WSのメンティーを経験して(鯉坂誠之) 2012年度の夏に初めてのTP(以下、初稿)を作成して以来、ある程度の時期をみて更新WSに参加しようと思っていたのだが、2016年度末にその時間がとれたのでメンティーとして取り組むことにした。私の初稿は例えるならば、初めての出場場で右も左も分からずただひたすらに周りの景色を見ることなく一気に駆け抜けた「マラソン」のようなものだった。従って今回の更新WSでは、その時よりも落ち着いて振り返っていくことを意識するようにした。まず、事前課題に取り組んでいく中で、私の場合は理念そのものが大きく変わっている訳ではないことを確認した。次に初稿から4年が経過していることから、変更すべき箇所をピックアップした。その変更箇所は①理念に至るまでの背景(ややエピソード的な内容)について、②責任の範囲としてまとめている担当科目一覧について、③理念を実現するための方略として記述していた各方法について、である。

更新WSでは、メンターの方とまず①と一緒に振り返ることで、自分の意識の中で「なぜ、その理念に至ったのか」「どうしてその理念を重視しているのか」がより明確になった。私の場合、民間企業における社会人経験(その時に感じた想い)が理念に大きな影響を与えていたのだが、初稿ではそのことをきちんと表現しきれていなかったのが加筆した。

次に②を振り返ることで、この4年間で非常に多くの科目(17科目)を担当してきたのだということを思い知

らされた。但し、すべての科目を取り上げて説明するにはTPの頁数が足りないことから、一覧表として整理するとともに、代表的な科目を取り上げて理念を実現するための方略との関係を簡潔に記述するよう心掛けた。

③では、その各担当科目における個々の方略を振り返りながら、初稿で行っていた方法から変更した内容や、初稿の際には意図していなかったものの改めて振り返ってみると他の方略と関連し合っていると考えられる内容について更新していった。具体的には、私自身の専門である「建築計画」という科目で行っている『建築スケッチ方式の講義ノート』の活用に関する記述と、学習意欲を向上させるために行っている『タブレットを利用したプレゼンテーション』や、ファシリテーション能力を高めるために行っている『討論スタイルのグループ学習』などによる能動的な取り組み(いわゆるアクティブラーニング)に関する記述である。初稿では整理しきれていなかった各内容を、更新WSによる振り返りを通じて、これらの取組みが実際には相互に関連しあっていることを感じられるような記述に改めた。

以上のように、私自身の更新WSでは何か劇的な大改訂が行われたわけではなかったが、同じ「マラソン」でも今度は周りの景色を楽しみながら周辺との関連を見出しながら仕上がり精度を高めていくことができたのではないかと考えている。

5. メンターを担当して

メンターを経験して(谷野圭亮) 2016年度のTP講習会において、メンターをさせていただいた。筆者は2015年度夏にTPを作成し、メンター側に立ったのは今回が初めてである。

メンティーとしてTPを作成したときと違い、他者の教育歴を聞き出し、共にポートフォリオ化する過程を共有したことによって筆者自身が1年前に立ち返り自分の教育方法、教育哲学について1年間でどのように変化したかを見つめなおす機会となった。他者のTP作成を手伝う際に自分自身が作成したTPを見返し、それに基づいたアドバイスを行う。それは、メンター自身の研修につながると感じた。

本WSは多くの場合人為的にメンターとメンティーの専門領域を離している。これについては、メンターの見識を広げたり、第三者の視点からのコメントをメンティーに伝えたりできる反面、境遇を理解しづらい点がある。筆者の場合は、応用言語学という教育を目的とした学問領域を専門としている為に、教育にかかわる視点は持つ

ているものの他の領域についての理解は乏しかった。

今回、看護学を専門とするメンティーを担当させていただき、今まで知ることのなかった「看護」という領域についての理解を深めることができた。また、共同で作業を進めていくうえで、お互いの専門性の共通点を見出すことができた。そこから発展する議論はお互いの見地から一つの事象に対して意見を伝えあい、統合し、共通の理解へと昇華させることができ、とても有意義であった。

初めてのメンターを経験して(古田 和久) 2016年8月に本校にて開催された第16回TPWSに初めてメンターとして参加させていただいた。「メンターシナリオ」,「メンターのためのチェックリスト」などの資料を読み進めるうちに、本当に自分がメンターをやっていくことができるのかという不安が募ってきた。特に、メンターシナリオの「はじめに」の節に「ティーチング・ポートフォリオの作成プロセスにおいてメンターは非常に重要な役割を果たします。(中略)メンティー自身による気づきを促すためです」と書かれており、これが最大の不安要素であった。前年の夏にメンティーとしてTPWSに参加したときのメンターは、話の展開が巧みで、意見を押し付けることなく、私の教育の理念を気付かせて頂くことができた。私は、果たして、そういうことができるのであろうかと疑問を抱いたまま当日を迎えてしまった。

担当させていただいたメンティーは、小学校で30年以上の養護教諭を経て、現在は大学にて養護教諭を育成する教員となられた先生であった。メンターとメンティーは、専門分野が異なる関係にするという方針と聞いていたが、私にとっては、そもそも養護教諭とはどういう仕事をしているのか全く想像がつかなかったので、1回目の個別ミーティングでは、お互いの自己紹介の後、養護教諭の仕事内容や、養護教諭になったきっかけなどを質問させていただいたところで、終了時間となってしまった。

その後のメンターミーティングでは、個別ミーティングでの内容を報告し、それに対してスーパーバイザーを含めて、今後のメンターミーティングの方針をアドバイスして頂けた。メンター経験が豊富な先生方は、初めてメンターをする私にとってのメンターでもあった。メンターミーティングで指導して頂いたことを、次の個別ミーティングにフィードバックし…、という流れを繰り返して、メンターチームの皆さんのおかげで、3日間のWSを何とか終えることができた。

修了式の後、メンティーからは、私のおかげでTPを書きましたとのお言葉を頂いたが、彼女は元々、深い教育

理念が比較的に見やすいところまで来ていたので、私のメンタリングがきっかけにならずとも、TPを書ききることができたのではという印象があった。まだ1回目のメンターの経験であり、本稿を執筆している今でも、彼女にとって良き(少なくとも悪くない)メンターになっていたかという疑問は持っている。今後、再びメンターになり、修了式で自信をもってよくやれたと思えるように精進したいと思う次第である。

メンターを経験して(倉橋健介) 前年度のAP作成に引き続き、2016年度は夏(第16回TPWS)および(第17回TPWS)にメンターとして参加させていただいた。WSの参加は通算4回目であるが、メンターとしての参加は今回が初めてであった。

メンティーとして参加した際にはメンターからのアドバイスのにより比較的スムーズにポートフォリオの作成にこぎ着けたこともあり、今度はメンターとしての確かなアドバイスが出来るかどうか不安であったが、2回ともに順調にポートフォリオの作成が進んだと考えている。自分が担当したのは夏・冬ともに大学の看護学の先生であったが、自分よりはるかに教員経験が長く、教育理念が順調にまとまり、あとはひたすら内容を詰めていくばかりであった。メンターとしてはかなり楽をさせてもらったと感じている。

メンターをしていく中で感じたのは、看護が「人」を見る仕事である、ということであった。担当したお方ともに、看護師として患者個人を看護する・奉仕するという職業意識が強く、看護と教育がどちらも人間個々の人生に携わる分野であることを考えれば当然ではあるのだが、それが教育理念を考えるに際しても基盤となっているように思われた。自分がポートフォリオを作成した時を思い返してみると、自分の専門分野は理学・工学であり分野としては違うものの、自分も自然現象に向き合う際のポリシーを手がかりに教育理念を探っていた記憶があり、職務に向き合う姿勢に強い共感を覚えた。と同時に、教育者として学生に向き合う姿勢について、自分とは違う視点を見せていただき、今後の教育活動にとっても有意義な体験であったと確信している。

メンターを経験して(和田健) 2016年度は、夏(本校開催の第16回TPWS)と冬(第17回TPWS)で1人ずつメンターを担当させていただいた。通算して4回目、5回目のメンター経験であった。

夏のTPWSでメンターを担当させていただいたのは、大学の保健医療学部看護学科の先生であった。これまで私

が担当させていただいたメンティーは、いずれも高専あるいは工学という共通点があったが、今回は学校も分野も違っている方でやや緊張と不安があった。しかし、そういう方をメンタリングしたほうがメンティーもメンターも新鮮で新しい気づきも多いと聞いていたので期待のほうも大きかった。実際、そのとおりで、少なくとも自分にとっては、学生に対する考え方や、教育の実践方法など大変勉強になることが多かった。メンティーは看護師・助産師として長らく医療現場に従事してきており、教員経験は短く、授業改善の目的でTPを作成したいということであった。WSには自作の授業スライドやプリント、学生からの授業コメントなど多数の資料を持参していただいており、エビデンスも揃ったTPを作成できるはずだった。しかし、残念ながら所属学科の都合で2日目午後、3日目午前には執筆作業を中断して大学に戻らなければならない状況になってしまった。最終日のプレゼンまでには教育理念をまとめあげることができたが、その時点ではTPはほぼ未執筆状態で、後日、メールでフォローしながら完成させるということになってしまった。

冬のTPWSでは、大学の国際交流学部の先生のメンターを担当させていただいた。現在、学部長補佐、FD委員長を務められており、大学にTPを導入することを視野に入れてのWS参加ということであった。これまでにアクティブラーニングをはじめとした教育の実践・工夫を多数されており、また所属学部のカリキュラムやディプロマポリシーの策定にも携わってきたということで、教育に焦点を絞りつつもややAPに近いTPという形となった。私自身は、APの執筆経験がないので、このあたりの構成を考えるにあたってはスーパーバイザーの先生に非常に助けていただいた。また、夏に引き続き、分野の違う教育現場の話聞くことができ、今後の教育に活かせる勉強をさせていただいたと思う。

メンターを経験して（東田 卓） 第16回では1名のTPメンターをさせていただいた。同時にSPのメンター並びにスーパーバイザーを兼務しとにかく大変であった。今回のメンティーはある大学の学長であり、私にとって初めて自分より年上の方のメンタリングであった。これまで主として教育者として学校の業務をされてきたが、教育とは全く別のお仕事をされていたご経験もあり、さすがは学長と思える多方面の博学さのため、メンタリングの中、メンター側としても大変勉強になった。メンタリングの過程で、TPの中に学長としてのお仕事も中に入りたいとお話があり、ややAPに近い立ち位置でTPを執筆されるということで、そのご

方針で構いませんよとお話が進んだ。これまでスタートアップシートを元に、ブレインストーミングとKJ法による教育の振り返りで、まずは教育の方法論を見つめてその中で不可視化されている教育の理念を「可視化」していくアプローチで行っていたが、この方は初稿からいきなり理念がしっかりと書かれていてたいへん驚いた。我々自然科学を研究する立場の場合、実験してデータを元に真理を見出すイメージでいたが、今回は理念から書き始め、次に方法を書くという「前から」書く手法で執筆された。逆にこの手法で有効な理念の可視化ができるか不安になったが、翌日からのメンタリングを通して方法論について色々伺いするうちに自ら「理念の可視化」が進み、随分流れの良いTPに変化していった。様々な奉仕活動や学長としての経営的な仕事、教育にかける情熱を感じメンターとしての勉強ができたと感じた。最終版では、「はじめに」から始まり理念から大変流れよく、最後の短期と長期のしっかりした目標のビジョンを示されたTPが完成した。今振り返れば、可能ならスーパーバイザー等の兼務無しでTPメンターをお引き受けできたらもっと学びがあったかもしれないと感じた。最後に学長主導で大学としてTPのWSを開催される話も伺い、メンターをお引き受けして大変良かったと思った。

メンターミーティングの意義を実感！（石丸 裕士）

今回担当したメンティーは、看護師として豊富なキャリアを重ねられた後、常勤教員となって間もない方で、スタートアップシートによると、「現時点での自己課題を明らかにしたい」との希望を持っておられた。私は、今回で3回目のメンターで、3日間のWSの間、いつ頃までに何を行えばいいかという流れをメンティーに提案できる程度になっていたものの、初めての看護系のメンティーの担当で、「課題」について理解できるだろうかと不安を抱えてのスタートだった。

メンタリングを通じて、専門看護師をやめて教員になった理由がメンティーの言葉で上手く説明できていないと感じておられることを知り、これができるようになることこそ、今回のTP作成の鍵だと感じた。そこで、メンターミーティングでの了承を得て、なぜ看護師を目指したのか、なぜ専門看護師になったのか、という具合に教員になる以前のキャリアにまで遡って、その理由を説明するよう提案し、この流れで教員になった理由についても説明してもらおうと試みた。しかし、2日目の午後になっても、その理由説明は上手くできず、理念も固まらなかった。私は、困り果てて、直後のメンターミーティングにおいて助言を求めた。すると、スーパーバイザー

から、「メンティーは自分自身のためのTPだと主張しているようだが、『自分の他にこのTPは誰に読んで貰いたいか』と聞いてみては?」との助言を頂いた。

その直後、この問いをメンティーにしたところ、「家族かな?」という回答があった。そこで、「ご家族に説明するつもりでTPをまとめては?」と提案したところ、教員になった理由について、より詳細な説明がなされた。これをメンターなりに理解し直し、「専門看護師をやめて教員になったと言うより、ご自身の環境の変化に応じて、看護師として最大限に活躍できるという場を模索した結果、軸足を置く位置を移したように感じました」と2日目の終わりにメンティーに伝えた。すると、3日目になって、教員として解決したい課題の具体例が挙がり始め、メンティーも納得できるような理念がまとまりはじめ、加速度的に完成に近づいていった。

これまで、専門の異なる教員経験の短いメンティーを担当することによって、自身とは異なる分野の方々の考え方を知ったり、自分が忘れかけていた若手教員に共通する悩みを思い出したりと有意義な経験をしてきていた。もちろん今回も同様の体験もできたが、それに加えて、自身のためにTPを書くと言っているメンティーに対し、「敢えて誰に読んで欲しいか」と発問することで、堰を切ったようにTPが進むという経験ができたことは、メンターとしてだけでなく、教員として、教育カウンセラーとして、貴重な財産となった。また、これまで、進捗状況の報告とメンタリング方針に間違いがないかどうかの確認にしか活用できていなかった、メンターミーティングの意義を実感できたことも大きな収穫であった。

普通のTP (井上千鶴子)

「普通のことをしてきただけです」「なぜそうするのかと言われても当たり前のことだと思うのですが」とおっしゃるメンティーがある。そういう時は、「ほかの方法を採っておられる方もあると思うのですが、どうしてそれを選んだのですか?」「学生が、どうしてそれをしなければならぬのですか、と訊いてきたらどうお答えになりますか?」など、手を換え品を換え尋ねてみる。

一方では、最新の授業法を取り入れ、赫赫たる成果とともにTPを書き上げるメンティーもたくさんおられる。自分の新しい試みが自分の教育目的に合致し、また期待した成果をもたらしているかエビデンスによって確認することは、TPの有効な使い方である。しかし、必ずしもすべてのTPがそのようであればならないかということ、そうではないと思う。まず、TPは自分のために、自分の授業を見直して教育改善に役立てるために書くのだから、優劣を論じても始まらない。自分の日記や子供の成長アルバムに優劣がないのと同じ事だろう。

それでも、所属校で共有したり、学生に公開するとなれば、何かしら「特別」なところがほしいと思う人もあるかもしれない。しかし、当たり前前の事をきちんと実行することは、実は簡単ではないし、とても大切なことではないだろうか。「当たり前前の事をしてきただけです」とおっしゃるメンティーは、信念(理念)を持って、その当たり前前の事を実行しておられる方が多い。お話を聞けば決して「当たり前」ではすまない。当たり前前の事をきちんと実行し、当たり前前の事をなぜ蔑ろにしてはいけないのか学生に説明できる教員は、信頼できる同僚だと思う。そんな教員がたくさんいる学校は、学生や保護者から信頼される学校だろう。「普通のTP」を積み重ねることが、学校の教育力を示すことになる。(特定のメンティーのTPに対する感想を述べたものではありません)

6. おわりに

以上の報告と考察から、メンティーはもとよりメンターにとっても自身の教育の振り返りや教員としての成長といった、教育改善効果が確認された。2016年度のWSでは、学外メンターも延べ8名を数える。学校単位でのWSは、メンティーを学内に限るところも多い中で、本校のWSはメンティー・メンターとも学外者を受け入れている。自校でのWS開催を視野にメンター経験を積みに来られる方もある。「府大高専をTPのメッカに」を合言葉に続けてきたWSであるが、本WSを母体として次々と新しいWSが生まれていくことで、少しは目標に近づけたのではないかと思う。この原稿がこれからTPを作成する諸氏及びTPWSの実施を考えておられる教育機関の参考になれば幸いである。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP17K01001の助成を受けたものです。

参考文献

- [1]北野ほか：日本初単一教育機関内ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して、大阪府立高専研究紀要、第43巻、pp.63-70(2009)。
- [2]北野ほか：第2回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告、大阪府立高専研究紀要、第44巻、pp.57-64(2010)。以降第50巻まで毎年報告を掲載している
- [3]大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会編著、実践 ティーチング・ポートフォリオ スターターブック～実質的な教育改善活動を目指して～、NTS出版(2011)。
- [4]ピーター・セルディン著、大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳：「大学教育を変える教育業績記録」、玉川大学出版部(2007)。